

スウェーデンの保育

講演者：ウェンドラー・由紀子

コーディネーター：山本理絵

2013年7月8日に本学でスウェーデンの保育について公開授業として講演会を実施した。その内容を以下にまとめ、紹介する。

講師紹介

10年前(2003年)よりスウェーデンに滞在。スウェーデン語を学ぶため、最初の2年はスウェーデン語の勉強に費やし、3年目に *Barnskötare utbildning* (バーンショータレ ウートビルディング) という准保育者育成コース、日本でいう専門学校を出た。そこでは心理学、就学前学校教育カリキュラムを中心に学び、2006年より *Björkens förskola* (ビヨルケン就学前学校) に就職。*Förskola* (就学前学校) は *skolan* スコーランというのが英語でいうスクールで、*för* フォーというのとは前という意味。学校の前の学校という意味。保育園 (*Dagis*) と長年スウェーデンでは呼ばれ続け今も保育関係者以外 (政治家まで!) *Dagis* と呼び就学前学校を保育をるところだけという意味で呼んでいるため私たち保育者たちは *Dagis* すなわち保育園と呼ぶことをしない。よってここでは保育園 (日本でいう保育園) をすべて就学前学校と呼ぶことにさせていただく。*Björken* (ビヨルケン) というのは就学前学校の名前である。

仕事に慣れていくにあたりもっと保育について知りたいと思うようになり、昨年 (2012年) の9月から大学の保育教師課程の育成コースを取っている。夏休み中に日本に帰郷している間に愛知県立大学に來訪した。

1. 保育者の養成について

(1) ソーダトン大学保育教師課程の育成コース

現在、*Södertörn* (ソーダトン) *högskolan* ハーグスコーラン (大学) に行っている。この保育教師課程の育成コースというのは、最低3年から5年、就学前学校で働いた保育者が入学するクラスなので、実地が免除され普通は大学は3年半 (210単位) だが3年で210単位取れるという仕組みになっている。一学期にゼミが4つ入っており、1つのゼミの期間が5週間になっていて、全部で6学期ある。

ゼミ1で保育教師の仕事の意味と、インターカルチャーについてなどを学ぶ。

ゼミ2は、保育に関する歴史の見解 *Pedagogiska tanke traditional* (ペダゴージェスカ タンケ トラディショナル) を学ぶ。*Fröbel* (フローベル、日本語でフレーベル)、*Reggio Emilia* (レッジョ・エミリア)、*John Dewey* (ジョン・デューイ)、*Sokrates* (ソクラテス) などを学ぶ。スウェーデンや北歐は、*Aristoteles*、*Sokrates*、*Platon* の考えが保育に根付いており *Elen Key* なども学ぶ。

ゼミ3では、美学スキル。子どもに算数や専門用語を教えるときに、自然の材料を使ったり、体を使ったり、ドラマなどで教える方法を学んだ。

最後のゼミ4は子どもと幼児時代の歴史 *Barndom historia* (バーンドム ヒストリア) を学ぶ。今のスウェーデンの保育がどのようにしてここまで来たかということ勉強した。スウェーデンというのは、世界で初めて虐待防止を法律化し

た国だったが、それは、国民と国が1対1でつながっていて、横の関連がすごく少なかったからだろう。日本は隣の人とか周りの目とかを気にしたり、人が困っていたら保護者同士や家族内で助けたりするが、スウェーデンでは、困っている人は国が助けるという考えが前からあったので、虐待を国がとめる、個人と国が1対1で関係することから虐待防止の法を浸透しやすかったらしい。

虐待や、いじめなどは、スウェーデンにもあるが、社会の視線があるので、まず保護者が子どもを冗談でもお尻を叩く、どなりつけるなどの行為は公の場では絶対ない。そのような場合には、すぐに通報、罰金、あるいは禁固となる。それは就学前学校の中でもそうであり、虐待の兆候を教師が通報しなくてはいけない義務があるので、大人が子どもに公で手を上げるということは少ないのではないかなと思う。もちろん家庭での閉ざされた部屋の中での虐待は日本より少ないとは言えないが。しかし子どもが法によって守られるため、社会行動や団体行動が出来ず子どもが自由に育ってしまうという問題もある。

次の学期では心理学、ドキュメンテーション、特殊保育や、最後の危機管理を学ぶ。虐待されている子のアブノーマルな行動と、もともとのADHDの行動が似ているとき、どのようにして見分けるのか、例えば、腕の上の内側にある痣は絶対自分でつけられないなど。それを、誰がやったのと子どもに問いただす話し方、そのような方法も詳しく学び、とてもためになったと思う。今年の9月から、室外でやる物理、化学、生物、算数、言葉、なども学ぶ予定。

遊びと学習の区別があまりスウェーデンではないように思える。それは子どもがすること全てが仕事または学習と考えていから、遊びという言葉あまり使わないで、彼らがやっていることは学習と見ている。例えば、昼時間にミートボールが献立のとき、そのミートボールを食べるのも学習の一環と考える。幾つある、5個とってくれと言う行動が言葉の発達となり、5個数える行為が算数となる。そして、5個のミートボールを半分

割ると10個になる。自分の順番を待つことで社会性を育てる。食べる前に手を洗うことが保健になる。そして、保育者と子どもが必ず会話をしながら、一緒になって食べる。保育者1人に対し子ども7人から8人(3歳から6歳児)、それ以上は会話が不可能なので一緒に座らないようにしている。

大学の学科は、3年後論文によって終了する。一般の保育教師課程の育成コースでは実地の時間が半年設けられ就学前学校に配置され一週間40時間他の保育教師たちと一緒に働く。

(2) 準保育者、正保育教師の質について

日本の保育者は、一般的にただの子守り、誰でもできる仕事と思われがちだが、スウェーデンでも保育に関係ない人はそのように思っているのが一般的だ。第三国から来た移民の人は、特にほとんどその考えである。ただ、スウェーデンでは正保育教師のニーズがここ数年強くなってきたので、就学前学校というより前学校というイメージがだんだんついてきた。そのため正保育教師の配置が強く望まれている。就学前学校としても正保育教師の配置がないと保護者に敬遠される。また、やはり保育教育がないものだけで運営している就学前学校は質も落ちる。

(3) 休暇について

スウェーデンは冬はすごく日照時間が短いので夏が来ると、大人も子どもも長い夏休みをとる。子どもは10週間(義務教育)、大人はだいたい4週間休みをとる。保育者にとって長い休暇に行われる夏の終園式はとても楽しみの一つである。終園式はどの就学前学校も大体保護者の前で歌を歌って祝う。

スウェーデンでは、雇用者は、労働者に最低3週間の連続した休みを夏に与えなければいけないという法律があるため、3週間は絶対に休暇がとれる。私の場合は今回は5週間だが日本から来ているということで、長いときは7週間ぐらい取るときもある。その間、給料は支給される。スウェ

ーデン人は土日以外に1年に25日休みを取る権利がある。夏休み、クリスマスや、イースターなどにそれらを取る。休暇を取ると出費がかさなるため、補助金が休んだ日にちの分出る。だから、休みをとらないと損なので休む。40歳以上になるともっと休みが増え、31日ある。31日というと6週間、1カ月半ぐらいある。

2. Läroplan（就学前学校カリキュラム）について

Läroplan för förskola は私たち保育者の聖書である。義務教育のLäroplanもあるが、Läroplan för förskola は98年に初めてできて、2010年に改正された。カリキュラムの主な内容は就学前学校の役目、人としての価値と基準、学習と発達、子どもと一緒にアクティビティーをつくる、家庭と就学前学校の関係、就学前学校と他の機関との協力関係、フォローアップ・評価・向上、園長（責任者）の責任などがある。カリキュラムは国、教育委員会により作られ、導入の仕方は就学前学校に委ねられている。だから、これをどう訳そうとそれに関しての監査は入らない。就学前学校カリキュラムは30ページぐらいあるが、この中で重要と思ったことを取り上げてみる。

子どもは、ある程度の限界はあるが、やりたいことを自分で選ぶべきである。保育者はあまり手伝わない。子どもにも可能性があって、自分でできることがあるので、できる限り自分でやらせて自分で遊ばせる。保育者が決めた時間決めた音楽で遊戯をさせるのではなくて、お遊戯がしたい子が自分の好きな曲で踊りたいときに踊る。したくない子がいれば、その子を無理やりにやらせない。そして、泥んこで1日遊びたい子は1日泥んこで遊んでいけばよい。けんかの成敗もなるべく入らないで、子どもたちで解決できるところまで見ていて、なるべく自分たちの言葉で解決させるところが、少し日本と違うのではないかなと思う。

子どもはグループの中に入っていくことが重要

で、その手助けは保育者がするべきである。保育者は子どもの社会性を育てる環境の一部であって、グループに入れたい子と遊ぶのが仕事ではない。例えば、仲間外れになった子がいたら、その子の中に入れるにはどう環境を変えたらいいのかとか、仲間外れになった原因はどこにあるのかというのを考えるのが保育者であって、一緒に遊ぶことが解決にならないと考える。

就学前学校によって違うと思うが、グループの大きさは1歳から3歳は15、6人である。3歳から6歳は21人。1グループに保育者は3人。10年前はもっとグループが小さかった。就学前学校カリキュラムをすべてやるにはもっと保育者が必要なので保育者たちはグループ縮小を望んでいる。私は日本人なので、自由奔放なやりかたにすごく不満があり慣れるのが大変だった。保育者が1人いて、生徒皆同じことをするのが、私の持っていた幼稚園のイメージだった。（私は幼稚園しか言っていないので）今思うとなぜみな同じことをさせられたのかというと、保育者がそのほうが簡単だからだと思う。4歳、5歳ぐらいになれば子どもの希望はよそに、保育者のすることだけを子どもにやらせれば、30人でも大丈夫だと思う。ただ、保育者が子どもの個人個人のニーズを見ていくスウェーデンのやりかたを考えると、21人を3人でみるのは足りない。

他の文化の違いを理解する手伝いをする。他の文化を理解することによって他の人の気持ちや価値がわかる。スウェーデンと聞くと、多分、ブロンドで金髪の人を思い浮かべると思うが、実は移民がすごく多い。特にクルド人、イラン、イラク、それからトルコが多い。ソマリア、ルーマニアチリなども多い。移民が増えていくにつれ移民の文化を教えることはとても大切と、就学前学校では力を入れている。

目まぐるしく変化する社会に出たときに1人で情報を探し、人と協力し合えるような基本をつくる。これは現スウェーデンの学校の基本である。義務教育の生徒の勉強とはどのようにして正しい情報を得るか、どの情報が要らないか、に重点を

置いており、ほとんど埋め込み式のテスト形式はない。その基本をつくるためにも、就学前学校では、チョウチョウの名前を覚えさせるのではなく、子どもと一緒に本やインターネットで調べる行動に重点を置いている。

遊びによって得られる経験、気持ち、言葉などを発達させられる環境を保育者たちは作らなければならない。保育者たちが、子どもたちがしっかりと遊び勉強できる庭や室内環境をつくるのが大切だと考えている。

移民の子にはスウェーデン語を覚える手助けをする。読み書きに興味を持たせる。スウェーデン以外の言葉も同時に発達するような機会を就学前学校は作らなければいけない。移民の子の中には、スウェーデン語ができない子がかなりいるので、スウェーデン語を強化しなくてはならない。そして戦禍を免れてきた移民はトラウマが多いため特別に対応しないと行けない。例えば、サプライズパーティでびっくりさせると、それが逆に恐怖体験とつながり楽しいアクティビティにならなくなってしまうときがある。自分の言葉で言える母国語というのをとても大事にしてあげ、スウェーデン語をしゃべれないことをマイナスとせず、母国語に価値を持たせ、母国語に対しプラスな雰囲気をつくるように就学前学校は努力しなくては行けない。スウェーデン語だけが言葉ではなく、ヴェルコンメン (Välkommen ようこそ) だけではなく、ようこそ、Welcome も使ってもいいよという雰囲気を作る努力をしないと行けない。(日本の単一国家、母国語のみを国語とするというような考えはスウェーデンにもあるが、スウェーデン語を取得する手段として子どもが環境になれやすいように母国語の使用を推奨する考えもある。ただスウェーデンでは移民が増えすぎたため予算が厳しくなっていており母国語の教師への予算が段々少なくなっているのが現状である。この母国語推奨の考えはジプシー、フィンランド人、サーメ人など国で保障されていた移民への対処がもとになっているが爆発的に増えるアフリカ、中近東の移民に対して新たな対処を政府もた

だいま検討中である。)

年齢に合わせてアクティビティーを組み込む。1歳の子と6歳の子と一緒に活動すると、1歳の子はすぐ疲れてしまうので、お昼寝の時間を入れるなど。

男女、宗教、文化、人種、思想、年齢、身体障害などに対するバリアフリー。全ての子どもは一般の就学前学校に来る権利がある。(低所得者は保育費用の免除があるがその場合3歳未満は週15時間まで3歳以上は週25時間までと決まっている。) 異文化を取り入れることに寛大なスウェーデンだが逆にスウェーデン文化が消えていってしまう。その反面すべての宗教、文化、人種、思想を持った子どもたちが伸び伸びと就学前学校に来られる雰囲気がある。この2つのぶつかり合いは今なお就学前学校以外の場所でも常に討論されている。

ジェンダー

スウェーデンは女性が強く性に対してオープンであるが、その考えは就学前学校から入れられている。ジェンダーの一番基本的な考えは、男の子にだけ鉄砲、飛行機、車のおもちゃをあげ、人形では遊べない雰囲気を作ると、暴力的になったり、「バーン、バーン」と「ブーン、ブーン」などの擬音語ばかり使うので語彙が増えない、また逆に女の子の場合は、人形で遊ぶと言葉は達者になるが、体が発達しないから、男の子用のおもちゃ、女の子用のおもちゃという枠を全部とってしまうということだ。モンテッソーリのようなニュートラルな感じのおもちゃを紹介して、男女それぞれ男の子用、女の子用のおもちゃを与える。すなわち50%の可能性ではなく、100%あげようという考えがスウェーデンのジェンダーの考えである。保育玩具を買うときにも、男の子が遊びやすい人形や女の子が遊びやすいブロックなどを買うように保育者たちは気を遣う。

室外は科目の宝庫である。ドングリが落ちていたらそれを使って算数ができるし、ドングリというのは男の子用でも女の子用でもないの、それ

を使って、男の子にも女の子にも同じことが教えられる。また、「男の子だから強いから泣いちゃダメ」というようなことも、ジェンダー的にタブーである。そして着ている服などのコメントも「かっこいいね」、「かわいいね」、などと言わず「素敵な色の服を着ているね」、「水玉の模様がある服だね」と中性のコメントを言うように心がける。

*性教育

ジェンダーがカリキュラムの中の教育理念に重視されているが、就学前学校で性教育熱心ではない。スウェーデンというと学校では性教育が活発だと思っていたが、それほどオープンではないと思った。両保護者ともお母さんの家族や、お父さんが2人の家族があるということ子どもに説明するくらいである。就学前学校のある地域によるが私のいる就学前学校はムスリムの人など移民が多いので、性教育はあまり喜ばれない。精子バンクにより生まれた子もいる。入園の際に書き入れる書類に以前は父保護者の名前、母保護者の名前という欄があったが、今はなく、両方とも保護者になっている。だか母保護者、父保護者が2人いてもシングルマザー、シングルファーザーでも、書く欄が困らないようになっている。

夫が欲しくないのに子どもだけ欲しいという人も結構多い。離婚も多いので、家族構成が複雑で誰のお父さんがどこの子どもでというのが、覚えるのが大変なときがある。継母であることを子どもが知らなくて、保育者のほうが知っていて気を遣う場合もある。また、父保護者の彼女が迎えに来たり、母保護者の彼氏が迎えに来たりすることも多々ある。

平等とは、みんな同じものを与えられることではない。例えば、今日は外でピクニックをするから同じホットドッグをみんなで食べよう、は平等ではない。お肉を食べてはいけないという家庭の方や、ムスリムの人たちは豚のお肉は食べられないからだ。それから、みんなで同じことをしようということも平等ではない。たとえば、ほとんど

の伝統が宗教と関連している。ムスリムの人にはクリスマスはないし、中国の新年は1月1日ではない。そうすると、クリスマスパーティーをすることは不平等になってしまう。これを打開するには世界中のお祭りをお祝いしたらどうかと私の就学前学校で議題に出たが、毎日お祝いすることになるので全部なくしてしまおうかと検討中である。

母国語・異文化に対するリスペクト

いろいろな外国の方がいる中、日本人はスウェーデンでは少数民族のひとつである。移民は、逃亡、戦争、政治経済的理由によって来ているものがほとんどだが、日本人は、医療関係者、医者、大使館関係、企業派遣者、国際結婚して来た者がほとんどのため、日本人の数は他の移民の数と比べると少なく日常生活ではほとんど会えない。今まで7年同じ就学前学校に勤務しているが、日本人の家庭の人は1人も私の就学前学校には来っていない。

我が家ではスウェーデン語と日本語を使っており、子どもと私は日本語で、主人とはスウェーデン語になる。小学校1年から英語を習う。息子は、今、小学校4年生だが、英語のレベルは日本の一般高校生より理解力発音に関しては高いと思う。家では全く英語は使わないためスウェーデンの英語教育が会話中心で使える英語を教育していてそれが結果に出ている例だと思う。ほとんどのスウェーデンの子どもは英語がとても流暢である。日本の英語の教育方法が非常に遅れをとっているのがわかる。長女は現在中2だが、中1になると第3カ国語を選ばなければいけない。そのためフランス語をとっている。中学までいくと英語のレベルは、多分、日本の英文科の大学のレベルだと思う。フランス語はまだ習ってから1年目なのであまり上手ではないが、日本語とスウェーデン語はネイティブ、英語も日常生活で全く困らないレベルを持っている。現地学校では母国語習得としてコミュニケーションより週20分の日本語の時間が与えられる。私の子どもは隔週でそれぞれ日本人

の教師により日本語を現地学校にて習っている。

子どもが言葉を獲得するとき、お父さんとお母さんが違う言葉話すときなどは、まず、母国語をちゃんと獲得するとその上に第2外国語が乗っていくそうだが、私の子どもの場合は母国語がスウェーデン語になってしまった。子どもたちが小さかったときは日本にいたため家の中の言葉は英語だった（主人との共通語だったため）。しかしスウェーデンに住み、スウェーデン人とばかり過ごすのでスウェーデン語が一番強くなってしまった。そのためあわてて日本語を教えることになったがすごく大変だった。今はちゃんとしゃべれるようになってよかったなと思う。ほとんどの移民の人の保護者は諦めて、片言のスウェーデン語で、流暢なスウェーデン語を操る子どもと話しているのを見ると、人それぞれだが、込み入った会話が出来ず子どもも両保護者もかわいそうだなと個人的に思う。

年の差別をなしにする（年齢で行動の可能性を決めるのは差別）

2010年に改正されて、新しく入ったもの一つで、大きいんだからもうできるでしょうか、小さいんだから仕方ないねとか、大きいんだから小さい子の世話しなさいみたいなことは差別であるという考え。この辺に敏感なところが日本と違うかと思う。年齢で子どもに成長にあった行動や言動を強制する、たとえばもう4歳なんだから一人でトイレに行きなさい。もう2歳なんだからおむつはずしなさい、などは、いじめと考えようということである。それでとくに異年齢保育に拍車がかかってきているのも現状である。ある程度の生理的な欲求、たとえば排泄、食事、お昼寝を抜かせばすべての子どもたちは一緒のことが出来ると考える。私の就学前学校でも小さい子の部と大きい子の部との境をなくそうと努力をしているが、なかなか古い考え方を捨てきれずにいる保育者などがいて実行はまだ難しい。

子どもが活動を決める

子どもが興味をもってやっていることを最大限に評価しそれをさせられる環境を作るにはどうしたらいいのかというのが、保育者の仕事だと考えている。毎年、就学前学校に来る子どもたちは、みんなそれぞれ個性があって違うが、その個性が違う人間にひな型の同じカリキュラムを毎年組むのは間違っていると考える。例えば、今年来た子どもの性格、趣味、行動力などをみてカリキュラムを決める。例えば・ピーターがバットマンが好きだったら、アクティビティーはバットマンのテーマにしたり、バットマンの本を借りる、バットマンの人形を買う、バットマンの絵を描かせる、インターネットでバットマンの情報を得る、など一緒に子どもと保育者がアクティビティーをつくる。ここが日本と大分違うのではないかと思う。

レッジョ・エミリア（イタリア）の考え方がすごくスウェーデンでは受け入れられていて、先ほど述べた教育カリキュラムは、ほとんどがこの考えでできている。子どもが決める、教師は子どもと一緒にアクティビティーをつくり、環境を整えるのが仕事、子ども同士で学ぶ、子どもが興味を持っていることに集中できるよう指導するのが仕事ということである。

他に、保護者との協力、どのように活動内容を理解してもらうか、いじめ対策などを含んでいる。

3. ビヨルケン・就学前学校

(1) インスピーラ・就学前学校の特徴

私の今働いているところは、株式会社の就学前学校である。会社は「インスピーラ就学前学校、学校(株)」で、インスピーラ 就学前学校 スクール アーバー (Inspira Förskolor och skolor AB) のアーバーABというのは株という意味で、株主。そのインスピーラ就学前学校の中にいろいろな地区があって、その中のストックホルム地方 (Stockholm län) のソーレントゥーナ (Sollentuna) コミューン (kommun 地区) などがありソーレン

ツーナの中にある1つの就学前学校がビヨルケン Björken という。ビヨルク Björk は白樺という意味である。白樺就学前学校と訳せばいいのかもしれない。興味のある方は、ホームページ (<http://www.inspira-fos.se/>) で見ていただくと仕組みがわかると思う。

インスピーラが他のコミュニン・地区、他の私立の就学前学校との違いとして、先ほどの就学前学校カリキュラムから重視し、売りにしているところは、大まかにいうと個性が大事、みな一緒（平等価値）、すべての人に対してリスペクトを持って対応することが必要というようなことである。

先ほどのカリキュラムの、30ページぐらいある中を7つに分けると（インスピーラが考えたもの）、言葉、社会、算数、自然科学・技術、価値、子どもによる参加、健康となる。なぜ7つかというと、これらの分野が後小学校に上がったとき国語、算数、理科、社会、コンピューター学科、道徳、体育としてそのまま学科となるからだ。この7つの分野を子どもによる参加、子どもがアクティビティーをつくりながら達成していくというのがインスピーラの理念である。

(2) ビヨルケン・就学前学校の年間計画

ビヨルケン就学前学校の1年間を紹介する。ビヨルケン就学前学校は7月1カ月間閉まる。保育者もみんな休みなのでフルオప్ప (jouröppet) となり、他の姉妹校に保育が必要な子どもが移動する。夏休み中どうしても働かなければいけない保護者のためにあいているが、みんなやはり夏は休みたいのでほとんど来ない。

昨年度でいうと、8月8～10日、13～15日が *Introduktion för nya barn* (イントロダクション フォー ニーア バーン)、ならし保育。朝の9時から午後2時まで保護者が子どもと一緒に過ごし、3日間ならし保育をする。その後通常の時間に子どもだけが通園する。日本では慣らし保育は乳児だけだが、途中から転入してきた幼児の子どもも一緒に扱いとなる。8月は保護者と別れ泣いている乳

児が多いため保育者の一番大変な時期。そのため、アクティビティーはない。9月に懇談会をする。10月はパジャマパーティー、などなど。学校にあわせ、秋学期は8月から12月で、春学期は1月から6月となっている。

就学前学校には、区の就学前学校と、私立、保護者との共同の3種類ある。共同就学前学校では保護者と一緒に保育内容を考えたりしていると思うが、本就学前学校では保護者が年二回ある懇談会に来るだけで、保護者が保育内容に対してアイデアを出すことはあるが基本的な保育内容は就学前学校側が決めている。

(3) ビヨルケン・就学前学校の週案・日課

表1は私たちが決めたものである。朝7時に開き、閉めは5時。もし必要であれば、6時から6時まで開けなければいけない場合もあるが、育児休暇が時間単位でもとれるので、だいたい普通の保護者は7時から5時の保育時間で足りる。日によって決まったアクティビティーがある。

1～3歳ぐらいの子は頻繁にお腹がすくので、9時にフルーツタイムが全員にある。そのときに一緒に座って話しをしたり歌を歌ったりする。日本語でいうと朝の会。スウェーデン語ではサムリングという。おやつは2時ごろ。

フルーツタイムやおやつやお昼ご飯というのは、子どもが食べたくないと言ったら、無理やりは与えない。9時、11時、14時とまめに食事を取るので子どもはおなかですいたときに食べればよいという考えである。食べさせる雰囲気を作り野菜を食べさせるのも保育者の務めである。

当就学前学校では、当就学前学校の直属の調理員がいるが、ケータリングが来る就学前学校もある。保育者たちがケータリングを受け、配当し、皿を洗ってケータリングを返すところもある。以前朝食もあったが、お昼を子どもが食べなくなるためなくなった。朝食を出す就学前学校は少なくない。

お昼寝の時間は、言葉がわかる子には本読みをする（写真1・2）。

表1 Skalmans schema för vår termin 2012 (3~6歳児グループの2012年春の予定)

Måndag (月)	Tisdag (火)	Onsdag (水)	Torsdag (木)	Fredag (金)
Förskolan öppnar för dagen !! (毎朝7時開園)				
Fruktstund (フルーツタイム)	Fruktstund (フルーツタイム)	Fruktstund (フルーツタイム)	Fruktstund (フルーツタイム)	Fruktstund (フルーツタイム)
Barnens egen dag (子どもの日)	Skogen (森)	Biblioteksbesök (図書館)	5 års grupp (5歳児活動)	Utelek/Innelek (外又は室内遊び)
		Skapande (図工) 	Skapand (図工) Språkresa (言葉の時間)	Planering (保育者たちのミーティング) 
Samling	Samling	Samling	Samling	Samling
お昼	お昼	お昼	お昼	お昼
Vila (お昼ね)	Vila (お昼ね)	Vila (お昼ね)	Vila (お昼ね)	Vila (お昼ね)
Fria aktiviteter (自由時間)	Fria aktiviteter (自由時間)	Skapande (図工)	Språkresa (言葉の時間)	Fria ktiviteter (自由時間)
Mellanmål (おやつ)	Mellanmål (おやつ)	Mellanmål (おやつ)	Mellanmål (おやつ)	Mellanmål (おやつ)
	Rytmik (リトミック)	Rytmik (リトミック)	Rytmik (リトミック)	
Utelek/Innelek (外&内遊び)	Utelek/Innelek (外&内遊び)	Utelek/Innelek (外&内遊び)	Utelek/Innelek (外&内遊び)	Utelek/Innelek (外&内遊び)
				
Förskolan stänger för dagen! (5時閉園)				



写真1 5歳児グループ (5 årsgrupp)



写真2 お休みの時間 Vila (3~4歳)

(4) ビヨルケン・就学前学校の職員体制について

大きい子のグループはスコールマン（Skalman）といって3歳から6歳まで22人の子どもがいる。基本的にフルタイムで働いている保育者が3人いるが、補助、加配も含めて5人スコールマンで働いている。私が大学に行っている間の木曜日、金曜日に補助として1人加担され、もう1人膝が痛くて休んでいる者があるため、その替わりのものが入っている。これら加担と代替の者のほとんどが幼児教育の専門教育を全く受けていないものである。

小さい子のグループはリッレスクット（Lille Skutt）のほうは1歳から3歳。16人。おむつの子がほとんどなので、基本的に保育者は3人いる。今は、糖尿病の子が1人いるため1人加配が入って4人働いている。4人のうち2人が保育者で他は幼児教育を学んでいない者。保育者2人が主に糖尿病の子の面倒を見る。それ以外に調理師1人と、園長保育者が2人、うち1人は、就学前学校がいくつかある一番上の責任者である。

加配の人が教育を受けていない理由として経済的理由が主である。例えば、糖尿病の子の加配というのは、その子がいなくなってしまうたら保育者もやめなくてはいけないし、区から出る予算は最低の賃金のみであるから正保育者を雇えない。保育教育がある人は、1年だけの短期間な仕事につかない。給料も正保育者は割高なので、その賃金はない。なので加配におむつ替え、掃除など簡単作業をさせその間に正保育者がドキュメンテーションを書いたり、計画を練るなどして役割分担をする。

基本1週間同じ保育者が3人でフルタイムで働いている。時差出勤はある。例えば、就学前学校を開けたものは早く帰り、閉めるものは遅くくる。3名一緒に働ける時間は必ず9時から3時と決まっていて、7時から9時、3時から5時は必ず3名のうち1人、2人は欠ける。

職員は現在全部女性だが、少し前までは男の人もいた。男性保育者は移民が多い地域では受け入れられずおむつ替えを男の保育者にさせたくない

とか、閉める最後の1人にしないでくれなどの苦情もある。しかしそういう保護者の欲求には応えない。なぜなら就学前学校カリキュラムに人種差別の廃止があり、男の人が就学前学校で働く権利があるので要求は受け入れない。ただ、今のところは、男性保育者がいることによってすごく喜ぶ保護者が増えている（ほとんどスウェーデン人）。やはりサッカーや体を使った遊びをしてくれるので、「サッカーをやってくれるからよかった」と喜ばれる。

(5) 障害児や病気の子どもの保育体制

障害児は、保護者が望むところに行かせる権利があるので、就学前学校側は受け入れ体制を整えなくてはいけない義務がある。だから、加配を必ずつけて、どんな状況でも合わせなくてはいけないという考え方が、全ての就学前学校に義務化されている。例えば、先ほど述べたように糖尿病の子に加配を1人つけ、普通の子と同じ生活をさせる。自閉症の子もダウン症診断の子も同じようにして、普通に就学前学校に来ている。だから例えば、障害児が多いところはそれぞれの子に加配がつくので保育者の人数が増える。子どもが15、6人しかいないのに、保育者が7、8人いる就学前学校もある。

しかし、たとえばADHDや自閉症も重度から軽度があるように軽度の子どもには補助が全く出ない。そういうとき区のほうから保育者への指導として2時間程度のアドバイスなどを要求することができる。糖尿病の子にはコミュニケーション・区から看護師などが保育者に実用的な指導を2、3時間しに来て、基本的に保育者が子どもの世話をみる。ADHDなどは加配の人に世話を頼むことがあるが糖尿病は注射器など生命にかかわる仕事なので加配にはさせないのが基本的であり、保育者が（正準どちらも）世話に当たる。

4. 就学前学校の実際

(1) 就学前学校の環境

当就学前学校の環境は外見も内見もよくない。当就学前学校のある地域は移民が多い地区で、就学前学校の子どもの40%がスウェーデン人で60%が移民である。先ほど述べたように、移民もいろいろな国から来ているので人種のるつぼといった感じだ。

スウェーデンでは駅の周辺に団地が密集している。そのような地域にある就学前学校は、団地の1階を広くくりぬいて就学前学校にするパターンが多い。保護者たちは、就学前学校に子どもを朝預けて駅に行くのがほとんどである。しかしこの団地の横にも一軒家の住宅街があるので、スウェーデン人もいる。生活水準は、中流から、少々補助を受けている家庭も少なくなくまばらである。入り口には柵がかかっている(写真3)。

スウェーデンでは、EUで決められた基準を合格した玩具でないと使ってはいけない厳しいルールがある。時々区による抜き打ちのテストが入る。

玩具が少しでも壊れていて使っていると基本的には就学前学校では置いてはいけないので、ちょっとでも壊れたらすぐ捨てる。危ないし、訴訟になるといけないため。(日本では手作りで作ったブランコなどあまり問題なく就学前学校や学校で使われているが、スウェーデンではヨーロッパ規格で合格したものだけが玩具として認められている。小さい玩具、子どもが直接乗ったりしないものは別。)

玄関は、車椅子でも入れるようになっている(写真4)。写真5の自転車の横の赤い建物が倉庫。そこに自転車やシャベルなど玩具を保管しておく。玩具は子どもが自分で自由に取って使っていることにしている。(私のところでは、そうでないところもある。)

玄関から入ると、入り口の写真6に見える左にある冷蔵庫のように見えるのは乾燥機。スウェーデンではどんなに雨が降っても雪が降っても必



写真3 外見 (Utetiljöö)



写真4 玄関 (Utetiljöö)

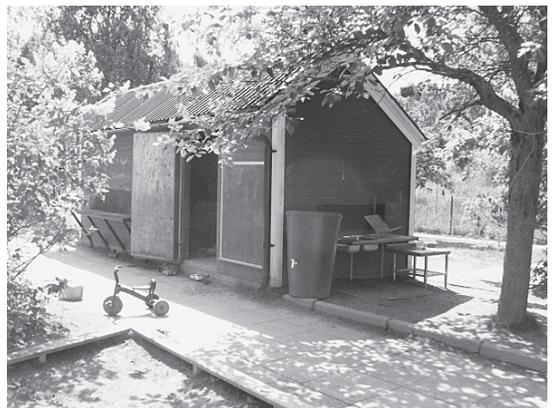


写真5 倉庫 (Utetiljöö)

ず一日一回は外に出るので、絶対に、どこの就学前学校にも学校にも乾燥機はある。

入り口(写真7)の左端に見えるのが galonbyxor (ガロンビクサー)。これは漁師さんみたいなゴム



写真6 入り口 (Innemiljö)



写真7 入り口



写真8 大きい子グループの室内 (Innemiljö)



写真9 大きい子グループの室内

のズボンで、これを履いて、長靴を履いて外で遊ぶ。9月、10月ぐらいから12月初めぐらいまではほとんど雨。11月、12月ごろは昼間が短い。室内にずっといると、やはり子どもも大人も気分が悪くなってしまうので必ず外に出るが、雨が多くて寒いので、こういうものを着て外へ出ないといけない。

大きい子のグループの室内（写真8・9）。テーブルで昼食、おやつを食べる。このカーペットの上で集まりなどをする。

カーペットの上のほうに、活動をやった作品のようなものが貼ってある。やりたい子だけの作品だけが展示されている。保護者がうちの子のがないかと質問されるが、あなたのお子さんはやりたくなかったからありませんと説明する。以前は、全員に嫌でもやらせよという考え方の保育者がい

たが、やりたくない子にやらせても学ばないし、全てのアクティビティーは全員ができない、平等だからこそすべてが一緒ではないという考え方を今はしている。したくないという権利も認めなければいけないし、全員がやらなくてもいい。全員が全て同じようなことはできないというふうに考えている。

写真9に見える室内の下の方にバインダーがあるが、これは子どもたちが自由に見えるように子どもたちが届くところに置く。子どもが1歳で就学前学校に通い始めたときからの写真、アクティビティー、お絵描きなどが入っている。基本的に、子どもの手が届くところに玩具は全部置き、保育者は整理整頓のお手伝いをし、お片づけは子どもと一緒にする。（掃除機をかけた後床の掃除は毎日清掃社が入っており基本的トイレ掃除、床



写真10 大きい子グループのアトリエ

掃除、キッチン、など掃除関係は保育者の仕事ではないのでしない。食べた後のテーブルの上、下の汚れを取るの子どもと一緒に保育者がする。)

(2) 就学前学校の1年

8月 慣らし保育 (Tre dagar inskolning)

保護者と一緒に3日間、9時から14時まで慣らし保育をする。写真11の真ん中にあるのは、保護者。この方の息子さんが入園したので、慣らし保育をしている。



写真11 慣らし保育 (8月 保護者と一緒に)

9月 テーマ色 (tema—färg)

8月が終わると、子どもたちが色の話に興味を持っていたのに私たち保育者は気が付き、色のテーマを始めた。枯葉が落ち裸になった木が寂しかったのでこの木は全部青いものを全部集めてみよ

うか、じゃ、この木はオレンジにしてみようかと子どもたちと決め、木を塗ったり色と同じ色の玩具をデコレーションしたりした。この庭でアクティビティーをするということで便乗効果もでた。道行く人にアピールができたし、保護者も何をしているのとか聞いてきたりした。普段保護者は園中に入ってまで就学前学校のアクティビティーを書いたドキュメントを見ることがなかなかできなかったのも、いかに私たち保育者と子どもが普段やっていることを外に出そうかというので考えた苦策なのだがよい結果となった。木に色を塗るのも全部子どものアイデアで、「塗ったらどうなる?」と言ったから、「塗ってみようか」と言って塗ってみて楽しんだ (写真12)。



写真12 テーマ色

10月 パジャマパーティー (pyjamas party)

パジャマパーティーは1歳から6歳まで合同でやった (写真13・14)。9時ごろいつものフルーツタイムになり、そのため真ん中にフルーツがある。みんなで集まって、「誰か食べたい?」などと聞いて、「はい」と答えているところ。パジャマパーティーのときに子どもの顔を塗ってあげたりしてパーティの雰囲気を出す。

パジャマパーティーは一日中パジャマを着てパーティを楽しむことが目的で、お泊りはしない。本来10月はハロウィンパーティをしていたが、元来ハロウィンはアメリカのものでありコスチュームを買える予算のない保護者、ハロウィーン



写真13 パジャマパーティー



写真14 パジャマパーティー



写真15 遠足



写真16 いじめ対策

を受け入れられない保護者、こわい仮面がこわい小さい赤ちゃんなどを考慮し、寝るときには何か絶対着ているからということからパジャマとなった。

大体、9月、10月は寒いが、遠足に週に1回行く（写真15）。

いじめ対策（Empati arbete）

いじめの現場を見たときに、その場でももちろん保育者が子どもに対して個人的に注意するが、対策として、人形を使って、名指しを避け実際にあったシチュエーションを例に出して、こういふときどうしたらいいとか教えたりする（写真16）。

基本的に、本就学前学校は小さい子のグループと大きい子のグループで部が分かれているが、ほとんどの活動を1歳から6歳までの子どもが一緒にするが、時々5歳児だけ集めて少し難しいこと

をする。いじめ対策の話は1歳の子にしてもわからないので、大きい子だけ集めてする。しかしながら今、スウェーデンの保育では、だんだん、このように年齢別に指導していくのはよくないという考えが出てきて、これもほんとうはやってはいけないのではないかという意見も出てきている。興味のある子だけやればいいのか、年齢で分けなくて、子どもの意思でやるべきだと。

11月 ルシア祭（Lucia）

1年で一番夜が長い日に、ジンジャークッキーの生地をいろんなものの型でくりぬいて作る（写真17）。これはスウェーデンの伝統的なものである。

ルシア12月13日当日、男の子は星の子の帽子で、女の子はルシアといって白いドレスを着る。ロウソクを持ってサントルシアを保護者の前で歌



写真17 ルシア祭



写真18 ルシア祭



写真19 スケート



写真20 雪での遊び

う (写真18)。これが、クリスマスの前の就学前教育の行事の一番大きいもの。一生懸命歌を練習するが、強制ができないのでクオリティーはかなり低い。歌わない子もいれば泣き出してしまふ子がほとんどで、日本に比べると本当にだらけた雰囲気である。

1月 スケート

1月になるとやることはスケートしかないのだからスケート場に行くこともある (写真19)。子どもはバスもスケート場も無料 (スケート場は区でやっているのですべての人に対して無料。)

2月 雪での遊び (写真20)

2月も寒いので、外やることといったら、雪の上に絵を描いたり、色のついた絵の具を吹きつけて、どんなふうになるかなど実験をする。そりに乗って遊んだりもする。

典型的な科学としては、雪を部屋に入れて、「これ、どうなる？」と子どもたちに聞く。雪は水になる。その後「水になったのを外に出してどうなる？」と聞く。「雪に変わる」と言う子が多く、氷に変わることを実験する。その他には、氷を使った彫刻を作ったり、いろいろなおもちゃを水の入ったプラスチックのコップに入れその水に糸を垂らし、型を外すとききれいなオブジェになる。それを庭に飾ったりして2月を過ごす。

3月

3月になると雪がだんだん溶けたり、また固まったりするので雪の固まりが出来る。それは見ようによってはお菓子に見えたり本に見えたり。その雪の塊を使ってお店ごっこをして遊ぶ。何個買います。いくらです。など算数も取り入れることができる。どの形が重いか、大きいのに軽い



写真21 雪を使ったお店屋さんごっこ

とか、なども算数教育として取り入れる。写真21はそれに雪の塊を載せてお店屋さんごっこをしているところ。

イースター祭（写真22）

スウェーデンの映画「ロッチャちゃん」に出てくるが、スウェーデンではウサギが卵を庭に置いていく。その卵の中にいっぱいお菓子やおもちゃが入っている。本来保護者がそのお菓子の卵を庭に隠して、子どもがそれを探すのが伝統。就学前学校ではお菓子ではなく、おもちゃやくだものを入れて子どもに捜させる。

4月 テーマ 感覚（tema—sinne）

今スウェーデンの保育はReggio Emiliaに影響をととても受けており、保育は大人が決めたレールの上に乗せるのではなく、ある程度の限度はあるが子どもが習いたいこと、興味があることをサポートし強化するという考え方に変わってきている。だからみんな決まった材料で同じときに同じことをするのではなく、好きな時間に好きなことをさせ一番子どもたちが興味をもっていることをみんなで話しあうというのがサムリング（集まり）の時間と考えている。子どもが興味をもったことはその場その場で保育者がサポートしていくのが最高の保育と考えている。

4月ごろ子どもが何かにおいを嗅いだりとか、やわらかいものをさわったりとかということをするごく興味深くやっていたので、今度はテーマを感覚にしてやってみた。テーマ感覚①は、私が豆を



写真22 イースター祭



写真23 テーマ 感覚①

袋から出しプラスチック容器に落ちる音を楽しんだ（写真23）。そして豆を触って硬さを楽しんだ。その後そこへ水を入れて、何日か経過をみてみた。豆はやわらかくなり次第に根が出てきた。

テーマ感覚②は、結構人気があった。紙の中に入れていろんなものを入れる。子どもに目隠しで、中身のものを何だろうと想像させ、描写させる。これが言葉の発達になる。これはやわらかいとか、これは何かつるつるしているとか、語彙を増やしてあげて、最後に物体の名前を言う。移民の子の特徴だが就学前学校にあるものの語彙の名前は結構も覚えるが、家にしかないもの、例えば、歯ブラシ、お風呂製品、などの語彙はやはり弱い。

7月 夏至祭（Midsommarfrande）

みんなが待ち望んだ夏至祭で、ダンスでお祝いする。ポール（木の棒）に花をつけて、この周り



写真24 夏至祭 (Midsommarfirande)

を踊る (写真24)。イチゴとアイスクリームを食べる。

5. スウェーデンの保育の問題点・課題

子どもの自由を重視しすぎて、和を考えないところがあると思う。自分が和を乱したせいでアクティビティーが中止になる、自分のせいでおもちゃが壊れて遊べないのおもちゃが足りないと文句を言うなど、和に対しての教育がされない。日本では保育者たちが一生懸命お遊戯を教えると、子ども頑張っついてき、保護者も一緒に協力してくれみんなで一つのことをやるのが美德だが、スウェーデンでは、個人個人個性が出ればよいと考える。だから、アクティビティーのクオリティーはかなり低いと思う。ただ、伸び伸びしている

ので、子どもにとってはすごくいいと思う。嫌なことはとにかくなくていい。だから、成長してからすごく差が出る。そのため特に移民や低所得者家庭は遅れをとってしまい、問題になっている。スウェーデン語をきちんとしゃべれない、社会にも入っていけない、仕事はもらえない。やはりしわ寄せが出てき、問題が多い。

保育者の賃金については、正保育教師の需要がとて多い区とそうでもない区との給料の差はかなりある。正保育教師の間で初任給で4、5万の差はある。また、日本だと、男の人が保育者になりたくても、いざ就職したら賃金の問題で大黒柱に将来なれないから、小学校教諭になるなどという不安があるように、スウェーデンでも小、中、高校教師に比べ保育者の賃金の差は大きく、5、6万はあると思う。やはりスウェーデンも日本と同じように、女の保育者が多い。私の大学も生徒88人中、男子の数が7人だ。ただ、スウェーデンでは税金の扶養制度がなく専業主婦がほばいないので、男の人は大黒柱である必要ではない。(2003年にスウェーデンに来たばかりのころ、まだ私の息子が1歳で上の子は4歳だったので、公園へ行って誰かのお母さんと友達になろうかなと思って行ったら、みんな働いていて誰もいなかった。結婚したり子どもができたりしても税金が安くなるわけではなく、全く変わらないので、男の人も女の人も同じように働かないと生活がやっていけない。)